

<書評>

書評 『西夏文字—その解読のプロセス（新装版）』
Review Tangut (Xixia) Script: The process of deciphering(New edition)

荒川 慎太郎
Shintaro Arakawa

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：2024年に再復刊された西田龍雄著『西夏文字—その解読のプロセス』について、西夏文字・西夏語研究の現在の観点から論じる。本書は「一般向け」とされているものの内容には難解な部分も多く、西夏研究者には周知な事情ながら、注意を要する点が多い。1節では本書と本評の構成、2節では本書の、西田による西夏語・西夏文字研究上の位置づけ、3節では本書の初版後の、西田自身による研究の進展から見た本書の価値と問題点、4節では現在の西夏語・西夏文字研究から本書の先見性と問題となる箇所を述べる。

Abstract: This review discusses Nishida Tatsuo's significant work, "Tangut script: The process of deciphering," which was republished in 2024, from the perspective of contemporary research on Tangut script and language. Although this volume is described as being written "for the general public," it contains many challenging sections and points that are well-known to Tangutologists, which still demand attention. Section 1 outlines the structure of this book and this review, Section 2 states the volume's position in Nishida's lifework of Tangut language and script, Section 3 evaluates the value and problems of this book from the viewpoint of Nishida's own research progress after the first edition, and Section 4 describes the foresight and problems of this book from the standpoint of current studies in language and script.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001027>

キーワード：西夏文字，西夏語，解読

Keywords: Tangut script, Tangut language, deciphering

1. はじめに

本書は1967年の初版刊行後、1994年の復刊を経て、2024年に再復刊された学史に残る名著である¹。本書を長く傍らにし、西夏語・西夏文字を学習してきた評者にはまことに喜ばしい。「一般向け」とされているものの内容には難解な部分も多く、言語学・東洋語・文献学の一定の知識も必要とする。それでも当時最新の情報と著者の該博・閃きが盛り込まれており、現在においてもなお精読の価値を失わない。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 西田（1967, 1994, 2024）はページも同一である。引用参照箇所については、初出時期を示す必要もあるため西田（1967, 2024: xxx-xxx）のようにした。

一方で本書には、西夏研究者には周知な事情ながら、注意を要する点が多い。そこで、2 節では西田龍雄博士による西夏語・西夏文字研究上の位置づけ、3 節では本書の初版後の、西田自身による研究の進展から見た本書の価値と問題点、4 節では現在の西夏語・西夏文字研究から本書の先見性と問題となる箇所を述べたい²。

本書の章題は次の通りである。

1. 解読の一般原理
2. 西夏の文化とその研究
3. 西夏語はどんな言葉か
4. 西夏文字の構造
5. 文字の持つ意味の解読

それぞれ、短く構成内容を紹介したい。

1 章は 10 ページほどの、本書中で最も短い部分ではあるものの、言語学者の考える「解読」とはいかなるものか、一般はおろか言語学研究者にも馴染みの薄いエトルリア語、ピュー語、ジャン・ジュン語、女真語などの例に驚かされる³。この章はのちの西田（1982a, 2002）で、アジアの未解読文字に言及される書の序となり、より洗練された姿に推敲されることになる。

2 章も一般的な西夏史を求めて読もうとすると、独自性にやはり驚かされることになる。西夏史を、通史的に述べる場合、チベット・ビルマ語派に属する西夏語を話す民族の故地からの北遷、李姓の下賜などが一般的だが（西田 1989a: 8-9 など）、ここではあえて漢文史観から離れ、チベット語歴史資料における西夏の章節を日本語訳することによって紹介している。一般的な西夏成立（1038 年、李元昊の皇帝即位）に先立つ歴史に多くの筆を割いているところに特徴がある。

3 章は、「いよいよ西夏語の言語特徴が述べられるのか」と期待すると肩透かしを食らうことになる。本章は『同音』、『番漢合時掌中珠』、『文海』、『五声（五音）切韻』の順で、西夏文字の音義解読の基本的な文献となる資料について、それぞれの成り立ちとともに概説する内容のためである。本章のタイトルはむしろ、『西夏語はどんな言葉か』を解き明かす資料なのである。ちなみに「西夏語の音韻・形態・統語について基礎的な情報が知りたい」と、以降の部分を通読しても、それらは遂に述べられることは無い。言語としての西夏語の姿は本書 170 ページに述べられるように「詳しくは拙著『西夏語の研究』下巻を見られたい」と、いささか不親切な案内があるのみである。

4 章は、まず西夏文字の構造について、どのように分析できるかが示される。「文字要素」と呼ばれる単位が西夏文字を形成する。「文字の派生」だけでなく、この文字要素同士にも「派生」が認められることがあり、その分類が提案される。「文字要素の字形の上の類似が、ある範囲内で、何か意味の親近性を反映しているのではないだろうか」（西田 1967, 2024: 129）というのが、西田による西夏文字分析、配列法の根幹となっている。最後に、文字（1 字形という単位）の派生と、そこに見られる西夏人の発想法が述べられる。

5 章は、「西夏文字の表わす意味を、どのように解読できるか」を述べる。いかなる資料から、どのような根拠に基づいて、西夏文字の意味を証明していくか、が実例とともに記される。当時としては最新の各種の分析が紹介されている。惜しむらくは、ここでは断片的に西夏語文法に関する情報が語られるものの、やはり文法の概略が分かりにくい。

² 本評では引用を除く西夏語音は荒川（2014）に従う。肩文字の 1, 2 は「平声、上声」という西夏語の声調を表わす。また西夏語音韻学における韻母番号は「1.18」で「平声第 18 韻」のように表わす。

³ 本評では西夏文字以外については言及を差し控えるが、契丹文字についての西田の見解「日本文のように表意文字と表音文字からできていて、ちょうど送り仮名がつけられた漢文のような体裁をとっていたと思う」は、後に彼自身が西田（1982a: 157-202）などで大きく修正したことは補記しておく。

2. 西田による西夏語・西夏文字研究における位置づけ

西田龍雄博士の学位論文（1962）に先立ち公刊された、「西夏語と西夏文字」（西田 1961）は西田による体系的な西夏文字研究の端緒であり，字形の分類と術語など，後の西夏文字分析・記述の原型となっている．そしてその後の西田による「西夏文字研究のための術語」がすでにみられる．例えば「対称」である．「西夏文字には，文字を構成する‘旁’と‘偏’が逆の位置におかれて関連する一群の文字がある」「筆者は，これを，かりに‘対称文字’と呼んでおきたい」（西田 1961: 401）とする．例を引用する．

𐵀「大」と 𐵁「太」； 𐵂「坤」と 𐵃「地」； 𐵄「雷」と 𐵅「閃く」；
 𐵆「水」と 𐵇「魚」； 𐵈「囚」と 𐵉「縁」； 𐵊「牢」と 𐵋「獄」；
 𐵌「盗む」と 𐵍「盗人」； 𐵎「退ける」と 𐵏「除く」； 𐵐「指」と 𐵑「爪」；
 𐵒「家畜」と 𐵓「畜生」； 𐵔「葱」と 𐵕「胡椒」； 𐵖「労苦」と 𐵗「苦しみ」etc.

「かりに」とされているものの，その後この術語名称が変わることは無かった．本評 4 節で再考する．

西田（1961: 400）で「基本文字」と「派生文字」としていたものは，その後，基本になる文字を「基本字」，そこから派生した文字を「派生字」と呼称するが概念は同じである．一般的な例を挙げる．

例） 𐵘「耳」→𐵙「聞く」→𐵚「聞く」 西田（2001: 538l）

本書 4 章後段にも，多くの実例が示されている．

西田の学位論文（1962）を元に刊行された『西夏語の研究』上下（西田 1964, 1966）の直後に出版されたことから分かるように，『西夏語の研究』のエッセンスを集約し，一般書として刊行化されたのが本書である．『西夏語の研究』は上巻が「1 章 西夏語研究の発展，2 章 西夏語音再構成の方法」，下巻が「3 章 西夏文字の分析，4 章 西夏語文法，5 章 西夏經典の系統」及び 200 ページに及ぶ「附録 西夏文字小字典」から成る．これらの内容のうち，上巻 2 章，下巻 3 章の内容が，本書 3, 4 章に反映されている．

本書は 1994 年の復刊に先立つ 1980 年，玉川大学出版会から『西夏文字 解読のプロセス』（西田 1980a）と，副題を変え，各章に注，「初版あとがき」に注，そして「再版あとがき」を加えた形で刊行されている．従って，内容的には大きく変わらないものの，著者自身による増補版としては，この玉川大学版が新しい．実は復刊が望まれるのはこの版である所以である．同書中の注は極めて専門的であるため一般の読者向きではない．しかし西夏研究者には一読を勧める．注のうち，西夏文字・西夏語に関する重要なものを 3 節で後述する．

西田は 1982 年，『アジアの未解読文字』（2002 年に『アジア古代文字の解読』として改題復刊）という，扱う文字群は特殊であるものの一般向けに平易に解き明かした一書を刊行している．その第 4 章となる「西夏文字の組織と使い方」（西田 1982a: 93-125）は，雑誌『月刊言語』の記事（西田 1980bc）に基づくため，西夏・西夏文字・西夏語文献に関する導入部もコンパクトにまとまっており，本書よりもこちらの方が，初学者向けのイントロダクションといえよう．

西田は 1980 年代，西夏韻図『五音切韻』の一連の研究（西田 1981, 1982b, 1983），西夏語詩『月月楽詩』の研究（西田 1986）を通して西夏語の研究を深化し，1989 年に『西夏文字の話』（西田 1989a）を刊行，同年刊行の『言語学大辞典』中巻（世界言語編）に「西夏語」の項目（西田 1989b）を執筆している．インターネットで簡単に西夏語・西夏文字の概要を知ることができるようになる以前は，この項目くらいしか，西夏語の概要を知る手立ては無かった．とはいうものの，この辞書項目では西夏文字の

1 文字も記されず（全て西田による推定音のみで言語として記述される）、内容も専門的で、一般向けであるとは言い難い。聶（2021）のような概説書が西田によって編まれなかったことが悔やまれる。

西田（2006）は「西夏語研究と法華経 IV（西夏文字の基本構造と双生字論）」となっているものの、ほぼ「西夏文字」研究である。西田（1996, 1997）などの西夏文字に関する新論考を踏まえた、西田の西夏文字論の総括とでもいえる内容である。西田（2001: 542-544）などに見られる「双生字⁴」論に加え、「当て字」「余剰字」などの観念が、本書での西夏文字論をアップデートした点である。長大な論考であるものの、西田（2012: 401-440）で修訂版が読めるので一読を勧めたい。

3. 西田自身による研究の進展から見た本書

3.1 西田(1980a)の重要な注

2 節で述べたように、その後の西田自身の研究に基づけば、本来本書には西田（1980a）の注が付されるべきであった。本節ではまず、注のうち、西夏文字・西夏語に関する重要なものを述べる。

2 章の注(3)（西田 1980a: 56-57）は西夏文字資料のうち、年代の分かる「最も新しい」ものに関してである。史金波・白濱（1977）（『明代西夏文経巻和石幢初探』『考古学報』1977 年第 1 期）の報告に基づくもので、1962 年に中国保定で出土した西夏文石幢が、明の弘治 15 年（1502）に作られたものであることが分かったという内容である。西田による旧版ではまだこの情報が無いため、文字使用の下限を 1345, 1348 年の記年に基づいて「西夏文字は前後三百年以上にわたって、西夏族によって使われたのである」（西田 1967, 2024: 42）としていた。明代西夏文は実際には、石幢に陀羅尼（仏典におけるサンスクリット音の西夏文字による音写）が刻まれたものであり、西夏語の使用を証明するものとはいえないものの、この情報は重要であり、今日でも「明代西夏文」として研究者に知られる。

3 章注(1)（西田 1980a: 119）も西田における「西夏語の声調」の推定に関する見解として重要なものである。西夏語には「平声」と「上声」と訳せる 2 つの基本的な声調があったことは文献から分かる。しかし実際にどのような調値であったのか、西夏人自身による記載はない。注の段階で西田は「平声は低平型で上声は高平型であった」と推定している。旧版では「平らな調子と上る調子」（西田 1967, 2024: 65）とあり、この部分に付された注であるから、その意味するところは大きい。その後 1980 年代の研究を経て西田は西夏語の声調に関して「同じ声調ながらレジスターの違うものもある」という見解を示している⁵。

3.2 西夏語の「助語」

西田（1986）などを経て、辞典項目「西夏語」（西田 1989b）に記述されたように、西夏語の文法、特に動詞句構造に関しては、西田自身の研究は大きく進展した。それに基づけば、本書における西夏語の「文法語」解説は大きく書き改められる必要がある。

本書では、西夏語韻書中「助語」（助詞、文法語に相当する）の注を持つ文字を 12 個抽出し、実際の機能を推測している。その中から、後の西田の見解・現在の研究視点からも変わらないものを省略して、本書の番号順に挙げる。3.2 の西夏語推定音は評者によるもので統一する。「」内は西田（1967, 2024:

⁴ この概念は、「西夏文字の創作者は、意味上、あるいは、文法上密接な関連をもった 2 つの言語単位を、字形の上でも類似した形式で表現する手段を考え出した。筆者は、その 1 対の字形を「双生字」と呼びたい」（西田 2001: 542r-543l）と定義される。ただし「語幹変形双生字」をはじめ、主要なものでも 7 種類に及び、この概念で説明が難しいものもある。

⁵ 「同じ平声でも声調のレジスターが違ったのであろう」（西田 1989b: 411r）など。しかし「レジスター」が具体的にどのようなものを想定するのか、とうとう示されることは無かった。評者自身は、チベット文字音注の考察から、「平声」は「高く平ら」、「上声」は「低く始まって上昇」を想定する（荒川 1999）。

175-176) による推定である.

- 1 𐵓²we: 「動詞の前につけられて, 使役<…させる>を意味する」
- 3 𐵓²di: 「この助詞のはたらきはいまのところよくわからない」
- 4 𐵓²ni: 「動詞のあとについて, <当然…である>といった必然を示す」
- 5 𐵓²na: 「動詞のあとについて, <…してほしい>という希求を示す」
- 6 𐵓¹na: 「動詞の前について, <充満した状態>を示す」
- 11 𐵓²wi: 「動詞に先行して, その動作の終結した状態を示す」
- 12 𐵓²da: 「動詞に先行して, その動作が進行持続している状態を示す」

これらは, 後の西田自身の研究でも整理される「動詞接頭辞」と「人称接尾辞」というのが正体である. 下では基本的なセット全てを挙げ, 当該の文字に下線を引くことにする.

西夏語には, 元々は動作の方向を指示する機能を持ったと思われる「接頭辞 1」(機能的には完了体を表わすのが主になる), そこからの派生「接頭辞 2」(接頭辞 2 の主母音が -e: となり, 願望希求を表わす) の対があるとされる. 西田は「来源となる方向」にも対を想定する.

動詞接頭辞のセット (西田 1989b: 418l, 419r より)

来源となる方向		接頭辞 1	接頭辞 2
「上の方に向かって」	𐵓	𐵓 ¹ a?-	𐵓 ¹ e:-
「下の方に向かって」	𐵓	𐵓 ¹ na:-	𐵓 ² ne:-
「こちらの方へ(話者の方に向かって)」	𐵓	𐵓 ¹ ki:-	𐵓 ¹ ke:-
「あちらの方へ(話者から離れて)」	𐵓	𐵓 ² wi:-	𐵓 ² we:-
「水源の方へ(内側に向かって)」	𐵓	𐵓 ² da:-	𐵓 ² de:-
「下流の方へ(外側に向かって)」	𐵓	𐵓 ² ri:-	𐵓 ² ryeqr'-

この組から外れる接頭辞 𐵓²di:- については研究者により機能・分類の見解⁶が異なる. 接頭辞 1 は「～した」という完了, 接頭辞 2 は「～しよう」という願望希求を表わす. これは現在でも基本的に, 西夏語研究者のコンセンサスを得ている.

西夏語の人称代名詞(と複数接尾辞)の音形と密接な関係がある, 「人称接尾辞」が動詞語幹に後置されることがある. 西田(1989b)にも記述されるが, そこでは西夏文字が記されないため, 読者には分かりにくいかもしれない. 西夏文字とともに一般的な対応を示す.

人称代名詞と人称接尾辞の対応 (荒川 2014: 158)

	人称代名詞	人称接辞
1 人称	𐵓 ² nga	𐵓 ² -nga
2 人称	𐵓 ² ni:	𐵓 ² -na:
3 人称	𐵓 ¹ tha:	-Ø
複数	○-𐵓 ² ni:	𐵓 ² -ni: ⁷

⁶ 西田の最終的な見解(西田 2012)では接頭辞 2. Кепинг(1985), Gong(2003), 評者は接頭辞 1 とみなす. 西夏語の動詞接頭辞に関しては Arakawa(2022)参照.

⁷ この要素は西田(1989: 417l-418r)においては「仮定」とされてきたが, 「複数性」を示す人称接辞とするのが現在では一般的である.

件の7つを一つ一つ検証することは控えるが、「動詞の前後」という形式的な位置は的確な指摘であるものの、意味については大きく修正が必要なものが多い。本書の復刊（1994年）時に加筆修正されなかったのが残念である。今後、読者には留意されたい。

4. 現在の研究から見た本書

4.1 研究史・文献学

言語学的な評に入る前に、研究史・文献学的な点で触れておかなければならないことがある。それは本書を通じて、西夏語音解明に重要な役割を担った韻書『同音』についてである。本邦においては、西夏語の一次資料の利用が限定的であった。ことにロシア所蔵西夏文文献が実見できなかった時代は長期に及んだため西夏語の韻書・韻図について、研究者は、ロシア研究者による断片的な情報と不鮮明な図像を頼りにするしかなかった。西田も研究の初期の段階で『同音』は実見できず、中国の学者による清書の石印版（羅 1935）に基づいて研究を進めた。その「入手」はややドラマチックに描かれる。

「その頃⁸、私は幸いなことに、＜中略＞西夏人の作った韻書『同音』を、偶然に入手することができた。＜中略＞私が、西夏語の研究をしはじめた頃は、この『同音』の名前は知っていたけれども、それが複製本として入手できる状態にあることは全然知らなかった。たまたま某日、京都の丸太町の古書舗（いまはなくなった）をたずねた時、この複製本を見付け、手にとってみて驚いた。＜中略＞さっそくこれを購入して検討してみると、この『同音』のシステムをうまく利用すれば、西夏語の再構成は必ずしもむづかしい仕事ではなさそうだと、次第に確信ももつようになった」（西田 1967: 63-64）

以降、紛らわしいので西夏時代の原書（一次資料）を『同音』、その清書『西夏國書字典音同』（羅 1935）を『音同』と呼び分ける。実は『音同』は西田の購入書が唯一ではない。評者は2017年、『音同』所蔵先のいくつかを回り、所蔵印の実見、登記簿の確認を行った⁹。

日本各地の『音同』（判明した収蔵年代順）

略称	所蔵機関	収蔵経緯と時期
東洋文庫本	東洋文庫	旅順庫籍整理処から寄贈され 1935 年 4 月 26 日に収蔵
国会本	国立国会図書館	同処から寄贈され、1935 年 5 月 4 日に収蔵 ¹⁰
京大本	京都大学附属図書館	1936 年 10 月 16 日、同処より寄贈され収蔵
東大本 A	東京大学東洋文化研究所 図書室	同処から寄贈「昭和 10 年（1935 年）4 月 30 日」の押印を持つが、登録は「昭和 11 年（1936 年）2 月 17 日」
東大本 B	東京大学大学院人文社会 系研究科文学部図書室	同処から「昭和 10 年（1935 年）9 月 10 日」寄贈、「昭和 10 年（1935 年）9 月 19 日」登記
早大本	早稲田大学図書館	「彙文堂」から 1942 年 1 月 7 日に購入
神外大本	神戸市外国語大学学術情 報センター	「昭和 24 年（1949 年）3 月 30 日」の受入
佛大本	佛教大学附属図書館	2009 年 10 月、故森鹿三京大人文研名誉教授より寄贈

⁸ 具体的には、前の段落から「1957 年」以降と読める。

⁹ この調査の顛末については荒川（2018）参照。

¹⁰ 現在デジタル資料が公開されており、マイクロは国会図書館（東京）、現物は関西館に所蔵される。

『音同』の収蔵時期はおよそ3期に分類できる。

- 1) 刊行当初, 旅順庫籍整理処から当時の国内東洋学の中心機関に寄贈された諸本
- 2) 戦時中・戦後早期の購入分 (早大本と神外大本)
- 3) 近年の寄贈 (佛大本のみ)

現在の国内所蔵は1950年以前にはほぼ完了している。つまり西田も1950年代, 関西の公的機関で『音同』を実見調査できたことになる。西夏文字の解明に西田の果たした貢献は計り知れない。ただし, 研究は偶然に見いだされた古書によるものではなく, 図書館でしかるべく検索・調査するのが先であることは指摘するまでもない。

4.2 音韻論

西田における, そして西夏研究全体から見た, 西夏語の研究課題には,

1. 西夏語の音韻 (再構音)
2. 西夏語の文法
3. 西夏語の語彙 (語彙層)
4. 西夏語の系統 (チベット・ビルマ語派としての西夏語)

があったと評者は考える。

まず1. については本書後の研究で重要な点を振り返る。

西夏語は古代文献語の中でも, 質量恵まれた対音資料があるほか, 西夏人自身の編纂した各種の韻書・韻図を持つ。ただ, その分量には限界がある。ソ連・ロシアでも長く行方知れずであった『文海宝韻』の再発見¹¹は西夏語の音韻研究にとって最大のトピックであった。その資料は確かに, 『文海』に失われた「上声」韻字をほぼ全て網羅するものであった。しかし各見出し字に, 『文海』のように漢語切韻系韻書のごとき形音義の説明が無く, 多くて数文字の補注があるのみであり, 研究者に過大な期待を抱かせるものではなかった。

次に, Gongによって整理・提案された「等韻」理論にもとづく西夏語の音韻の再構成である。簡単に概略を示せば, 「西夏語韻書において, 主母音を同じくする韻母群は一等, 二等, 三等 a, 三等 b の順で並べられており, 三等 ab と結びつく声母は相補分布をなすため, 基底で同一の韻母と見做せる」¹²というものである。これにより西夏語の母音体系はシンプルに整理され, 『夏漢字典』(李編著 1997) をはじめとする西夏語辞書, 現在の西夏語推定音表記のスタンダードとなっている。

1980年代後半以降, 西田の関心・研究が主に2, 3, そして西夏文字に移ったこともあり, 上の点に基づく, 大きな推定音の修正は見られなかった。

さて, 本書において, 西夏語音韻面で注視すべきは次の一節である。

「最後に残った十九番目の文字は, つぎのように読んだと思う。この反切上字は kha であり, 下字は mba である。そしてそれを“合わす”と書かれているから khamba という発音が自然に生れる。＜中略＞例外的に一字を二音節に読む文字もあったらしい。ほかの例を出すと＜泣き声＞は『ku-mbar 合』を持っているから, やはり二音節で kumbar と読んだ」(西田 1967, 2024: 111)

事実であれば, 西夏文字の「1文字=1音節=1語または1形態素」という原則を大きく変える事象であるが, 今日同一の見解を示す研究者はいない。それは「合わす」ではなく「合(口韻)」と解するのが妥当だからである。当該のそれぞれ文字と反切を示すと,

¹¹ 発見の経緯, 同資料の意義などは Kychanov (1999), 史 (1999) など参照。

¹² 詳しくは Gong (1994) 参照。

李 5679 𐵓 𐵓 𐵓 kh-ya(1.18), b-ya(1.18) 「合」 導き出される当該字の音形=khwyā
 李 1029 𐵓 𐵓 𐵓 k-uq(1.58), b-ar(1.80) 「合」 導き出される当該字の音形=kwār

のようになる。この 𐵓 は「合（口韻）」つまり-w-介音（渡り音）を持つ音節を示すと解釈するべきで、今日多くの研究者が、それぞれ kiwa, kwār のように推定している。反切上下字は全て「開口韻」であり、ここでの「合」は-w-介音を補うために表記した記号的なものであろう。後の西田の著作でも明瞭な訂正はなされていないため注意する必要がある¹³。また、本書の刊行当時は字義に関する資料が乏しかったため、西田は前者を「カンパ」とし「チベットの＜カムス人＞を意味した」（西田 1967, 2024: 109）とするが、現在の研究では「余剰」（韓 2021: 7 巻 166-167）とするのが一般的である。

4.3 西夏語文法

前節で述べた通り、西田（1989b）に記述されたように、西夏語の文法、特に西夏語の動詞句構造に関しては、大きな研究の進展があった。西夏語の動詞句は時に接頭辞・接尾辞を伴い、複雑な様相を見せる。これらは古いチベット語・ビルマ語資料には確認できない言語現象であるものの、チベット・ビルマ語派の少数民族語、特にギャロン系の言語においては珍しい現象ではない。ただしもちろん西夏語文献が、言語現象の確認できる最古のものであり、研究の価値は高い。

本書ではせめて、西夏語の基本語順（SOV, N←Adj.）、名詞は格標識をとる場合があること、動詞句が時に複雑であること（1967 年代では接頭辞・接尾辞が整理されていなかったとはいえ）、名詞・動詞は屈折する場合があること、が示されていれば、より読者の指標になったかもしれない。

ここでは動詞句以外で、評者が気になった点を論じておきたい。それは西夏語の遠称指示代名詞の扱いである。まず、西夏語の指示代名詞は次のような字形と推定音を持つ。

近称 𐵓 ²thi:

遠称 A: 𐵓 ¹tha: B: 𐵓 ²tha: C: 𐵓 ²tha:

西田は「もともとは、この両形式【荒川注：上記 AB】は、代名詞と形容詞の対立をになっていたのではないかと推測できる。《あれ》*thafi（上声）：《あの》*thafi（平声）」（西田 1966: 271）という推測を経て、本書では以下のように述べ、「より適切であるように思う」としている。

代名詞と形容詞は形の上で区別がなく、近、遠、最遠の三種類から成立するシステムをも想定できる。

＜この、これ＞²thi（上） ＜その、それ＞²thafi（上） ＜あの、あれ＞²thafi（平）

（西田 1967, 2024: 168-169）

この遠称指示代名詞に関しては評者もかつて考察したことがあるので、概略を述べておきたい。まず荒川（2015）の冒頭を引用して、指示代名詞と問題となる点を述べる。A～C は上記と同様である。

「西夏語は近称、遠称の指示代名詞を持つ。名詞を修飾する場合は、指示代名詞一名詞という語順となる。遠称の指示代名詞（以下、遠称代名詞）は、先行研究において 3 種が指摘されているものの、その使い分けについては判然としなかった。筆者の統計で、文献中、出現頻度の高い順に、A, B, C とすると、A と B は同一音節で声調が異なり、B と C は同一音節で声調も同じである。全ての文字は、共通する文

¹³ 西田（1982b: 54）では前者について「二つの文字を合一した形式」として「khamba と読んだのであろう」とする一方、西田（1983: 141）では後者について特に説明なく合口韻「k-war₂ 合」を推定しており、不整合が見受けられる。

字要素は持つものの、異なる字形の西夏文字で記される」（荒川 2015: 103-104）

以降、荒川（2015）から、評に関係しない C についての言及・考察を除いて説明する。まず A と B は文献を調査すると有意な分布を示す。まとめた分量があり、遠称代名詞の使用例が多い以下の仏典を調査した。文献略称，対象巻数，調査文字総数，遠称代名詞出現総数(内訳)，出現率の順に示す。

『法華経』序，巻 1，2，3 断片，4-8	52,051 字中 539 字(A438, B97, C4)
『華嚴経』巻 1-10，36，77	84,596 字中 526 字(A390, B127, C9)
『金剛経』（全）	5,960 字中 68 字(A61, B6, C1)

上記の資料から、遠称代名詞がどのような環境で現れるかを調べた。遠称代名詞と直後の要素の関係は表のようになる。数字は三つの經典に出現する回数の和である。「3 種の遠称代名詞が出現した数の和」の順に左から右に配する。例の総数が 4 例以下の場合などは省略した。

表 3 種の遠称代名詞と後続要素

文字発音	名詞	𐵄 ¹ e:	𐵄 ¹ chya:	𐵄 ¹ kha	𐵄 ² ri:r	𐵄 ¹ byu	𐵄 ² do	𐵄 ¹ she:	𐵄 ² u	𐵄 ² ngu	𐵄 ¹ su
意味		-の, -を	-の上	-の間	-と	-に随い	-の所	-により	-の中	-を以て	-よりも
A 𐵄 ¹ tha:	766	1	1	0	25	20	4	17	0	8	5
B 𐵄 ² tha:	1	70	69	54	0	0	13	0	13	3	0
計	772	71	70	55	25	20	18	17	13	11	5

表のように、AB の出現環境は相補分布的な状況にあることが見て取れる。遠称代名詞に後続する要素には次のような傾向がある(ほぼ頻度順。次の「」内は荒川（2010: 157-158）にもとづく格標識などの意味）。

A : 名詞，「～と」，「～に随い」，「～により」，「～を以て」，「～よりも」

B : 「～の，～を」，「～の上」，「～の間」，「～の所」，「～の中」

A は名詞を修飾する場合が多く、後置詞が続く場合も、随伴・付帯を含意するものにほぼ限られる。一方 B は、ほとんど全て後置詞が後続していた。ゆえに考察では、A，B の使い分けが、後続する要素の語彙的な違いによるものと結論付けた。B については、𐵄¹e: が後続する場合を除いて、「場所を示す遠称代名詞」すなわち「そこ」と見なせる場合が多いことも指摘する。

本書で西田は遠称代名詞について、後続する要素を十分検討していなかった嫌いがある。とはいえ、評者による分析もまだ道半ばであり、分析を進めていく必要がある。

4.4 西夏文字研究

西田による一連の考察が西夏文字研究を進展させたことは間違いない。しかし今日の研究から見ると再考を要するものもある。例えば 2 節で挙げた術語である。

西田が 1961 以降、「対称文字」と呼ぶ一連の文字群がある。西田（2001: 541r）では「何らかの形で、文字要素が左右あるいは上下に対称される形で配置された字形」と定義される。ここでいう「対称」の意図がやや理解しがたいながら、西田（2001: 542l）の例を挙げる。

- (1)  左右に同じ要素を配置する 例) 𐰇「双」, 𐰇「比べる」
 (2)  中央に縦1画を書き, 左右に同じ要素を配置する 例) 𐰇「間」, 𐰇「斉しい」
 (3)  :  2字の間で対称関係が成立する 例) 𐰇「雷」と𐰇「電」

例を見る限り, (1), (2)と(3)は区別するのが妥当と思われる。また, 「対称」というより(1)は「重複」, (3)は「交替」と呼ぶのが適当ではないか。評者は(1)のパターンは「左右要素重複字」としたい。(2)については(1)を基本字とする派生字と考える。西夏文字では(3)のような, 左右の構成要素を交替させるという造字法も一般的である。評者は暫定的に「左右要素交替字」と呼ぶ。

例) 𐰇²dzwo: 「人」 VS 𐰇¹ne: 「心」

本評ではどうしても批判的な部分が多くなってしまったが, 語義・字義に関して, 現在の視点でも西田による分析が有益であることは少なくない。例えば, 𐰇を『夏漢字典』(李番号 2706)は「暖」という意味のみ挙げている。西田はこの文字の構成から「二字をまとめて否定して作る字形もある。さきにあげた𐰇「<=太陽・火>の偏と, 𐰇<冷たい>」の中央・傍を否定して, <熱くも冷たくもない>が作られる」(西田 1967, 2024: 58)と正しく解釈している。このような文字の解析を通じた意味の説明は, 今日でも一読の価値を有する。

5. おわりに

本書は, 評者が高校・予備校時代に繙き, 現在の西夏文字・西夏語研究を志すことになった, 思い出深い本のうちの一冊である。「繙き」と書いたが, 当時の私には全く内容が理解できず, 文中の西夏文字を練習するのが関の山であった。大学に進み, 『西夏語の研究』, 『同音研究』(李 1985), 『文海』(史金波ほか 1983)などに触れて, ようやく一端を理解できた。インターネットで「西夏語」「西夏文字」を検索できなかった, 1967年当時の一般の方には内容の把握はおろか, 通読も困難であったであろうことは, 想像に難くない。

本書は古典的な名著であるものの, 西田自身の研究としても途上にあるもので, その旨を理解したうえで臨まなければならない。本評における言葉足らずの補足が, わずかでも読者による理解の助けになれば幸いである。

参考文献

- 荒川慎太郎 (Arakawa, Shintaro) . 1999. 「夏蔵対音資料からみた西夏語の声調」『言語学研究』17-18. 27-44.
 _____ 2010. 「西夏語の格標識について」澤田英夫(編)『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』, 153-174. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 _____ 2014. 『西夏文金剛經の研究』松香堂.
 _____ 2015. 「西夏語の3種の遠称指示代名詞の使い分けについて」『言語研究』148. 103-121.
 _____ 2018 「日本国内各所に所蔵される『西夏國書字典音同』を巡って」『遼金西夏史研究会 NewsLetter』第10号: 29-33.
 _____ 2022. Directional prefixes in Tangut: Outline, types, and some remarks. In Shintaro Arakawa & Ikeda Takumi (eds.), *Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 3 Function of Directional Prefixes*, 15-54. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
 Gong Hwang-cherng (龔煌城). 1994. A hypothesis of three grades and vowel length distinction in Tangut. *Journal*

- of *Asian and African Studies*. Nos. 46–47. 305–314（龔 2002 に再録）。
- 2002. 『西夏語文研究論文集』台北：中央研究院歷史語言研究所（2011 年に再版，また北京：民族語文出版社 2005 も発行）。
- 2003. Tangut. In G. Thurgood and R. J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, 602–620. London: Routledge.
- Кычанов, Е. И. (Kychanov, E. I.). 1995. Wen-hai bao-yun: The book and its fate. *Manuscripta Orientalia*. 1.1. 39–45.
- Кеппинг, К. В. (Kepping, K. B.). 1985. *Тангутский язык. Морфология*. Москва: Наука.
- 韓小忙. 2021. 『西夏文詞典』（全 9 卷）北京：中国社会科学出版社。
- 李範文. 1986. 『同音研究』銀川：寧夏人民出版社。
- 李範文編著. 1997. 『夏漢字典』北京：中国社会科学出版社（増補修正本 2008. 簡明版 2013）。
- 羅福成. 1935. 『西夏國書字典音同』旅順：庫籍整理處。
- 聶鴻音. 2021. 『西夏文字和語言研究導論』上海：上海古籍出版社。
- 西田龍雄. 1961. 「西夏語と西夏文字」『中央アジア古代語文獻』（『西域文化研究』Vol.4）391–462. 西域文化研究会編。
- 1964. 『西夏語の研究ー西夏語の再構成と西夏文字の解読』I, 座右宝刊行会。
- 1966. 『西夏語の研究ー西夏語の再構成と西夏文字の解読』II, 座右宝刊行会。
- 1967. 『西夏文字ーその解読のプロセス』紀伊国屋書店（復刊 1994, 再復刊 2024）。
- 1980a. 『西夏文字ー解読のプロセス』（1967 の増補版）, 玉川大学出版部。
- 1980b. 「西夏文字ー組織と運用ー（上）」『月刊言語』9(9). 76–82.
- 1980c. 「西夏文字ー組織と運用ー（下）」『月刊言語』9(10). 94–101.
- 1981. 「西夏語韻図『五音切韻』の研究(上)」『京都大学文学部研究紀要』20. 91–147.
- 1982a. 『アジアの未解読文字』大修館書店（西田 2002 は増補改訂）。
- 1982b. 「西夏語韻図『五音切韻』の研究(中)」『京都大学文学部研究紀要』21. 1–100.
- 1983. 「西夏語韻図『五音切韻』の研究(下)」『京都大学文学部研究紀要』22. 1–187.
- 1986. 「西夏語『月月樂詩』の研究」『京都大学文学部研究紀要』25. 1–116.
- 1989a. 『西夏文字の話』大修館書店。
- 1989b. 「西夏語」亀井孝ほか編著『言語学大辞典』中巻 408–429. 三省堂（西田 2012 に修訂再録）。
- 1994. 『西夏文字ーその解読のプロセス』紀伊国屋書店（復刊）。
- 1996. 「死言語の復元と表意文字の解読ー西夏語と西夏文字の特性ー」『月刊言語』8 月号. 28–36（西田 2012 に再録）。
- 1997. 「西夏文字新考」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東方学会. 1348–1355（西田 2012 に再録）。
- 2001. 「西夏文字」河野六郎ほか編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』537–547. 三省堂。
- 2002. 『アジア古代文字の解読』（中公文庫）中央公論新社（西田 1982a の増補改訂）。
- 2006. 「西夏語研究と法華經 IV（西夏文字の基本構造と双生字論）」『東洋学術研究』45(2). 247–208（西田 2012 に再録）。
- 2012. 『西夏語研究新論』松香堂。
- 2024. 『西夏文字ーその解読のプロセス』紀伊国屋書店（再復刊）。
- 史金波. 1999. 「西夏文写本《文海宝韻》」『民族語文』1999 年第 4 期. 40–50（史 2005 に再録）。
- 2005. 『史金波文集』上海：上海辞書出版社。
- 史金波, 白濱&黄振華. 1983. 『文海研究』北京：中国社会科学出版社。

執筆者連絡先 : arakawa@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2024 年 12 月 11 日